

聞き書き

島の精神文化誌

第68話

御田植祭

(鹿児島県種子島)

土屋久

本話では、南種子町荃永松原の御

田植祭を訪ねました。この祭は、同地に鎮座し玉依姫をたまよりひめご祭神とする宝満神社の祭礼です。毎年、四月三日に赤米、御稻おねと呼ばれる米の苗をオセマチと言われる御神田に植えて豊作を祈願する農耕行事となります。

オセマチに隣接する御田おたの森と呼ばれる丘の上に祭壇を拵え、赤米の苗などを供えて神事をおこなった後、その苗をオセマチに植えていき

ますが、その際には、太鼓に合わせて田植唄が唄われます。

田植えが終わると、オセマチ横の舟田と称される舟形の田の畔でしやにん社人夫婦が赤米の苗を持って御田植舞を奉納し、その後、その苗を舟田に植えていきます。しかし、今日では、社人がいなくなつたので、この形態に多少の変化が出てきています。

そして、最後に直会なおひがあり、ここで前年に収穫された赤米のおにぎり

が出されます。

ちなみに、荃永に伝わる故事では、この地に稲作を伝えたのは玉依姫です。

「古代米」とされる赤米を伝統的に栽培している地域は、全国でもここ荃永地区と、長崎県対馬市豆まめ酸、岡山県総社市の三力所しかありません。平成二八年三月には、その希少性が認められ、「種子島宝満神社の御田植祭」として、国の重要無形民

令和8年度 御田植祭祭礼の次第

4月2日㊦

■祭典と御田植えの準備、幟立て
同 3日㊦

■祝儀は、シュエー取りと御田の森の神事場の設定としめ縄張り(シュエー取りは、5時半頃から前之浜にて)

■総代会と地区公民館は、オセマチのしめ縄張りしめなわと幟旗(色旗)立て、若苗とり、ニナーギ(若苗を担ぐ道具)の作製(準備は8時半頃から)

■御田の森での神事が始まる(9時頃から)

■祝殿のオセマチ四方被い

■御苗授けの儀(祝殿から総代長へ、総代長から地区公民館長へ)

■オセマチでの御田植え

■御田植舞

■宝満神楽

■直会(11時頃終了)

(「古代米の赤米の伝承地 南種子町荃永」宝満神社総代長宮里照夫を参照)

俗文化財に指定されています。

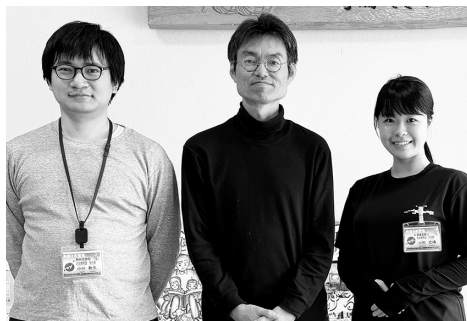
さて、それでは祭礼に関わる方々からお話をお聞きしていきます。まずは、広田遺跡ミュージアム学芸員で南種子町教育委員会社会教育課文化係長の石堂和博さんに、種子島の稲作の起源と赤米の位置づけについて伺いました。

弥生時代の中頃から続く稲作

石堂 種子島で一番古いお米が、いつぐらいのものかというところ、考古学では二千年ぐらい前、弥生時代の中期の米づくりが確認されています。種子島で出土した当時の土器に粃殻の跡がついているので、きっとその時期からお米を作っていたんだろう、ということですね。縄文時代に使われていた、ドングリを擦り潰して粉にする石器の出土が、種子島でもだいたい弥生時代中期に減ることとも合致します。ただそれ以前にお米

づくりを全くしていなかったかは、ちょっとわからないです。

『日本書紀』の天武一〇（六八一）年に、律令国家が種子島のことを調べた報告が出てくるんです。その中に、種子島はお米がたくさん穫れる島で、一回植えたら二度収穫ができる、と書いてある。だから少なくとも七世紀の中頃くらいには、種子島では米がきちんと穫れるということが文献史学からもわかっていきます。



南種子町教育委員会社会教育課文化係長の石堂和博さん（中央）、同課学芸員の小川能生さん（左）と小村恋晴さん。小川さんと小村さんは令和8年度新たに南種子町に就職した（筆者撮影）。



野木田遺跡を紹介する南種子町教育委員会埋蔵文化財係の小脇有希乃さん。

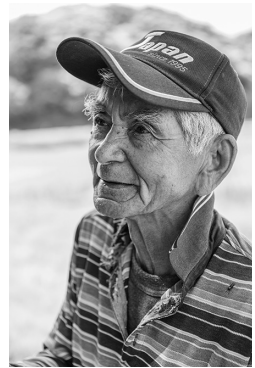
国指定史跡の広田遺跡（弥生時代前期から古墳時代前期にかけて）に関して、暮らしていた人たち（広田人）の骨を調べてみると、ドングリも食べていますが、お米をきちんと食べていることがわかりました。さらに最近見つけた、稲作の直接的な証拠があるのが、茎永地域の野木田遺跡で、大体三〜六世紀ぐらいになります。

東南アジア伝来と思われる赤米

石堂 宝満神社の赤米は、我々が普通に食べているジャポニカ種ではな

い、という研究があつて、東南アジアのお米（ジャバニカ種）に近いとされます。なので、東南アジアから伝わったと考えるのが自然です。黒潮に乗って日本人が渡来したとされる、いわゆる柳田國男が提唱する「海上の道」で運ばれてきたんじゃないかと言う人もいますが、考古学をはじめ学術的な証拠はなく、いつでもやつて伝来されたのか、については特定できません。一方で赤米の起源は古くあつてほしいという思いもあります。稲作の伝来ルート of 玄関のようなこの地にいまも赤米が残っているのは、その長い歴史を象徴しているのではないか、と考えたいところですね。

続けて、宝満神社の総代長で、宝満神社赤米お田植え祭り保存会会長である宮里照夫さんに祭礼の順序や現状についてお話を伺います。



宝満神社赤米お田植え祭り保存会会長の宮里照夫さん。

茎永地域で営む御田植え祭

宮里 茎永地域には、一〇の集落があります。北部の方から、上里、新上里、菅原、雨田、中部、仲之町、宇都浦、松原、阿多羅惜経、竹崎です。大崎という集落もあつたんですが、ロケット基地建造の際に買収されてなくなりました。茎永は水田地帯です。真ん中を宮瀬川が流れ、支流も多く、畑は少しあるぐらいです。昔は葉タバコやサトウキビを作っていました。

赤米を取り巻く組織は、宝満神社宮司と宝満神社総代会、茎永地区自

治公民館の三者で保存会をつくり、県の重要無形民俗文化財に指定されたのを機に、いまの「宝満神社赤米お田植え祭り保存会」という名称に変更しました。私が会長です。地区公民館というのは、地域の自治組織で、小学校区単位で設けられています。それと神社の宮司ですが、私は宮司とは言わず「祝殿」と言います。宮司という名称は、対外的にしか使いません。

平成二六年に赤米の伝統が残る二市一町（総社市、対馬市、南種子町）が、地域間交流を深め、次の世代に伝承することを目的に協定を結びました。歌手の相川七瀬さんの仲介です。

御田植え祭には一連の流れがあつて、まず四月に入つて宮司がオセマチの代明け（代掻き、田んぼに水を入れて、土を砕いて均平にしていく作業）をします。四月二日に、保存会

による準備があつて、幟もこのときに立てます。本番は三日です（行事次第参照）。早朝の宮司によるシュエー取り（清めのための潮を海から取る行事）に始まり、御田の森での神事の準備やオセマチのしめ縄張り、神事、荃けいなん南小学校の男子児童を含む地区の男性による御田植え、御田植舞などがあります。御田植舞は、御田の森の前の「舟田」と呼ばれる田んぼの畔でおこなう老夫婦の舞です。いま、お願いしても膝が悪いとか言つて踊り手がおらず、今回は私と祝殿さんの奥さんの二人で舞います。最後に直会があります。

九月が収穫祭です。オセマチは、面積が約一・五アールあるんです。米は三〇キロ獲れば豊作です。不作に備えて、別の水田で予備の米を作ることもあるのですが、ここ四、五年はその必要がないぐらい収穫できています。

近年知られるようになった宝満神社

宮里 宝満神社がいつごろできたのかは、はっきりした記録がないんです。文化四（一八〇七）年に梶原瀬左衛門という人が記した『宝満宮縁起』によると、太宰府の竈門山かまどやま宝満宮を一四世紀に勧請した、と書かれている。記録はないものの、もつと古い時代からあるんじゃないかと、私たちの間では言い伝えられています。神社のご祭神は、玉依姫で、鸕鷀草葺不合尊うがやふあすのみことの奥さん、神武天皇の母親です。

神社は世襲制ではありません。宮司は私の一つ年下ですが、なかなか新しい宮司の成り手がないんです。それに社務所がないため、常時人がおらず、御朱印もできないし、お守りも配布できない。お守りだけは、正月の三が日だけ仮設の社務所を作つてお分けしています。希望と

しては、私の元氣なうちに社務所ができればと思っています。

いまみたいに、マスコミが来て、大々的に宝満神社は良い神社だな、と言われるようになったのはごく最近のことです。御田植祭も、鹿児島本土からテレビが来て放映してもらつて、少し知られるようになった。それ以前は、参拝客もほとんどいない神社でした。きっかけは、やはり相川七瀬さんの活動が大きいかもしれませんね。

宝満神社のことに関するすべてのことは、宮司がやっています。昔の宮司は、神事だけやつていたんです。かつては社人と呼ばれる人がいて、社人が田んぼを作ったり、またその御田植祭の準備をしたりと、一手に引き受けていました。御田植舞も社人が踊ったんです。時代の流れで、社人がいなくなり、会計を担当する人もいなくなつた。その時に、

地区の責任者だったわれわれの先輩が、そこに誰かを割り当てて運営をしていればよかったんですが、してこなかった。そのおおりで、宮司が一手にやらざるを得なくなつて、今日にいたるのだと思います。いまの宮司は、いろんなことができませんけど、後継者を見つけておかないと、次の人は同様にはできないかもしれない。昔のように役割分担をしたり、いまのうちに若い人に教えていかないと途絶えてしまいます。

私が子どもの頃は、御田植えは大人だけでやっていた。いまの宮司になつてから、小学生も入れることにしたんです。今日集まつていた総代の半数は私に近い年齢なので、御田植えの経験がなく、稲刈りをしたこともありません。苗を束にするんですが、藁での結び方を知らないんです。だからいま練習をしておかないと大変です。

女人禁制の御田の森

宮里 オセマチに隣接する御田の森は、地元では「ガロー」と呼ばれ、島の古い神様を祀る場所の一つです。普通の神社ではないので、鳥居などは何もありません。大きなウバメガシの巨木があつて、それが御神木です。そこに宝満神社の神様を呼んで神事をして、終わつたら神様をお帰ししてから御田植えをする。神社ではないので、普段参拝をする人はいません。われわれも年に一回、御田植祭の時に玉串を奉奠^{ほうてん}するだけです。

御田の森は、女の人は上がれない、オセマチで女の人は田植えをしない、ということとは、子どもの頃から言われます。男でも、御田の森には、御田植祭の時にしかお参りしません。昔は、若い女の人も入つて田植えをしたという言い伝えはあるん



御田の森に設られた祭壇。中央にあるのが赤米(筆者撮影)。

ですけど、われわれの世代になると女人禁制となっています。

女人禁制については、校区民と宮司の間に見解の相違があつて、宮司は御田の森に女性を入れたり、田植えをしてもらうことに躊躇しないんですよ。私どもが言つても聞き入れない(笑)。ただ、刈り取りの時は、小学生の女の子も田んぼに入れています。

続けて、宮里照夫さんと宝満神社宮司の松原堅二さんの奥様・光江さんに赤米や直会で出る食事につい

て、また、堅二さんに赤米や神事について、お聞きします。

直会でしか口にできない赤米

宮里 オセマチで育てた赤米は門外不出。種粳も苗も絶対に外に出さない。結果的には、赤米をわれわれが口にするのは御田植祭の直会の時だけです。だから直会に参加しない人は食べられない。地区の公民館の役員をするか、神社の総代をするか、そういう役をしなかった人は、一生かかっても赤米を口にすることはな



宮司の松原堅二さん、光江さんご夫妻。

いんです。持ち帰って、子どもに食べさせることはありませんけど。地元で日常的に食べられてきた伝統はないです。

直会の料理は全部、光江さんを中心につってもらっていました。作り手の女性の負担を考慮して、本年度は地域の食堂に、赤米の握り飯も含めて直会の料理を頼んだようなので、どんな風にできるのか興味津津なんです。

光江 直会で出す赤米は、前の晩から水に浸けて、ピンポン玉大のおに



宝満神社で、奉納された赤米を見せる松原宮司。

ぎりになっています。自分たちがやるようになってからは塩をちよつと入れて、食べやすい感じにしています。月桃の葉っぱで包んでお皿代わりにしています。

それと飛魚とにんじん、大根、ツワブキ、そしてワリダイコン（干し大根）の煮染めです、あとは御神酒を添える。赤米は炊きづらいんですけど、昔は羽釜で炊きました。ガス釜の場合は、差し水をしながら炊きます。

神事を一手に担う宮司

堅二 自分たちの時代は、田んぼを耕すのに耕運機はあったんだけど、それ以前は馬。島で馬の繁殖もしてたけど、自分たちが覚えているのは北海道から馬喰^{ばくろウ}が来ていた。当時で、馬の価格は五〇万から六〇万円、一〇〇万円のときもあったかな。高くって買えないから、自分の馬

を下取りに出して、新しい馬と交換するの。

赤米は、背(草丈)が高く、一六〇センチ程あります。収穫前に全部倒れちゃうからいまは作る人もいない。今年は倒れず真っ直ぐ立ってるな、と思うと、稲穂が空っぽなのよ。稲穂を握れば、粃が取れるから、おそらく昔は叩いて脱穀したんだと思う。普通は、稲を刈ったあと、刈り跡の真ん中から藁わらが出るんだけど、赤米は竹みために節があつて、何節かあるうちの、折れたところから出てくるの。宝満神社では、根っこから抜いた赤米の稲を、今年はこのように稲が穫れましたと、一年間、神様にお供えます。見学に来る子どもたちに持たせて自分の背と比べさせるの。

神主には、三〇歳の時になりました。昭和の時代からです。四〇年も経つと、それなりに勉強します。赤

米の祭り(御田植祭)は、別に特殊な形式ではなくて、一般的な神社神道のやりかたと大体一緒です。いまの形は、自分で作つてやつているんだけど、それ以前はもつと簡単な形でした。お供えをしてお祭りをしてね、神社の神様を持ち上げる感じ。昔は神社の祭りが終わってから地域の田植えをしていました。

この祭りの九五パーセントぐらいは自分が準備している。まず田んぼの準備、草刈りをして、田起こしをして、縄や幡の準備もしないといけない、いろいろです。いまは苗をハウスで作っています。苗も女の人は触れません。おそらく昭和の初めはオセマチの隣にある田んぼで苗を作ったんじゃないかな。なぜかはわからないけど、粃もみは昔よりだいぶ穫れます。一房当たり、だいたい一五〇粒は粃ができるんだけど、もう半分以上はシイラ(秕) (しらい) 中身のない稲粃)

で、空っぽ。半シイラという、軽いけど実のなるものもあつて、それはノギ(粃の先端に生える長い毛)と一緒に飛んでいつて、発芽する。赤米の発芽率が高いよ。

今年も、苗の育ちが御田植祭に合うかな、と思つてたけど、背丈が一二センチメートルにもなつて逆に大きくなりすぎた(笑)。

周囲の田んぼの稲と赤米は交配しない。実る時季が違つて、いま植えられる早期米は、七月に稲刈りするでしょ、赤米はその頃まだ穂も出てない。赤米は四月から一〇月の収穫まで、半年以上かかる。去年(令和七年)は一〇月一日、二日に稲刈りを、荃南小学校の児童を含め、皆でやりました。九月、一〇月まではマムシがいるのよ、だから、稲刈りの時は必ず子どもと子どもの間に大人が入りなさいよ、と言つています。赤米は背が高いので、全部同じ

方向に倒れる。だから、マムシに噛まれんように少しずつ、倒れている根っこの方から刈っていくんです。

昔は、稲刈りも田植えも社人さんといって、別の人がやっていた。だから神主は神事をすればよかったんですけど、いまはもういないから、一から十まで全部、自分がやるから大変よ。神事もそうだけど、若手に準備のやり方も教えていかんとね。いろいろな道具があるから、どこかに置いておける場所が欲しいんだけどね。自分個人で持ち出している部分もある。

神事の中核は種子^{たね}の伝承

堅二 祭の日程は自分が決めた。もう土曜日にしてくれだとか、日曜日だとかうるさいから、「四月三日、雨天決行！」と（笑）。なんで雨天決行か、というと、直会しないといかんでしょ。以前、順延で食べる物

が弱って（傷んで）いたことが一回あった。それで四月三日に決めて、直会ができなかったときは持つて帰れと、臨機応変にやってます。

一番大事なのは、祭りの部分ではなく、赤米の種子の伝承、種粃をいかにして残していくかです。あとはもう自然についてきます。だけど、六月の初めに台風が来ると、種が残らないから大変で、種を出すために、植えているのを半分くらい刈って、藁が付けた種を来年の御田植えに使う。いままでに二回くらいあつたかな。藁から採ると、普通と違って稲穂が赤くなるの。おそらく気温が理由だと思う。対馬や総社の稲穂も赤くなるので。一月に総社に稲刈りに行ってきました。種子島も寒が入ったときにやつぱり赤くなる。不思議ですね。一〇年ぐらい前までは赤米の陸稲も種子島にあつたんだけど、いま残っているかはわかりま

せん。

神事は、宝満神社ではやりません。ここのお祭りは、神籬祭^{ひもろぎさい}といって、御田の森の神籬に神様を呼んでそれでお祭りをして、帰ってもらう形です。

ところで、種子島の北に位置する西之表市浦田地区に鎮座する浦田神社は、一七三八年に書かれた『浦田大明神縁起書』によると、ウガヤフキアエズの命（鷗鷺草葺不合尊）が祀られているとされます。同書には、命は日向国から種子島に渡り浦田に住まれ、廃れていた種子島の農業を再興したと書かれてもいます。神社の境内には、命が下の田んぼに稲の種子を蒔いたとされる「お種まきの石」があり、稲作発祥縁起が残る神社です。

同地の郷土史家である長野勝さんに、浦田神社と宝満神社の関わりな

どについてお話をお聞きしました。

夫婦神を祀る浦田神社と宝満神社

長野 浦田神社は、もともと浦田の港の先の小島にあったようです。笹の宮とも浦田大明神とも呼ばれていたそうです。小島は、聖域とされていて、いまでもほとんど人は入りません。一七三八年に、現在の場所に社が造られて遷座しています。

宝満神社との関係では、『浦田大明神縁起書』に、浦田明神と宝満神は稲のタネを交換することがあると記されています。茎永の神稲は赤コメ、浦田の神稲は白で、どちらか一方が途絶えた時は、一方からもらってきて植えると、赤は白に、白は赤に変じて稔ったと書かれています。ウガヤフキアエズの命と玉依姫は夫婦神ですから、こうしたことが言われるのかもしれませんが。

御田植祭は、浦田でも明治の頃ま



長野勝さん。浦田神社境内にて。

ではおこなわれていて、いま住宅になつていところはみんな田んぼでした。

最後に再び、宮里総代長と松原宮司に本年度の御田植祭を終えての心境を伺いました。

伝承継承の萌芽

宮里 茎南小学校の新五年生の男の子が、今回の御田植祭で、田植唄のデビューをしたんですよ。田植えの最中ずっと和太鼓を叩いて、唄を唄うんですが、ところどころで彼が唄

っていました。その子は、やる気十分で、伝統的な唄も好きだったようなので白羽の矢を立てたんです。こういう人材がいること自体が一つの宝ですね。

次の世代に伝統文化を残すためには、後継者を育てないといけませんから、それができたことが、今年の一歩の光明だと思います。彼が出たということ、他のことについても良い影響が出る。ホッとしています。

堅二 今年は、天気にも恵まれてよかった。田んぼも綺麗に植えてもらったし、また自分が忙しく働かないといけない(笑)。

今回は御田植祭の後、午後二時から宝満神社で、火星探査衛星を積んだロケットの打ち上げの成功と安全祈願祭を頼まれています。赤米とは関係ないので、パツと気持ちを切り替えないと。

昔、小学校の創立記念日に、子ども



オセマチでの田植え。奥には御田の森が鎮座する。

土屋久（つちやひさし）
昭和三十八年神奈川県出身。共立女子大学、
順天堂大学兼任講師。青ヶ島、八丈島、沖
縄などをフィールドにシャマニズム研究に
従事。島の精神世界に惹かれ、ここ三〇年
ほど島通いをつづけている。共著に『生活
文化論ノート』（高志書院）がある。

前号におきまして誤りがありました。
深くお詫び申し上げますとともに、
次の通り訂正いたします。
五二頁上段九行目
（誤）お父さん↓（正）祖父

巻頭グラビア(P1～)もあわせて
お読みください。▶▶▶

もたちに、自分たちのところは、最
先端をいくロケットの打ち上げ場が
あって、一方で昔から伝わっている
赤米がある。そんなところはあまり
ない。自信をもつて、胸を張って、
社会に出てくださいと話しました。
この赤米の伝統を、子どもたちに
もしっかりと伝えていきたいね。
（収録…令和八年四月二日～四日 宝満神社、
御田の森、たねがしま赤米館ほかにて。筆者
撮影以外の写真はすべて小原佐和子）